「シビックプライド」とまちづくり～“科学のまち”つくばの取り組み～

筑波総研株式会社 研究員 小 泉 尭 史

はじめに

「まちづくり」という言葉が生まれてから半世紀以上が経過した。この間、「まちづくり」の概念や活動は多様に変化し続け、今日ではあらゆる場面で使われるようになった。そうした中、近年「シビックプライド」という概念に対する関心が高まりつつある。

本稿では、シビックプライドの概念とまちづくりの関係に触れた後、つくば市を取り上げ、シビックプライドの醸成という観点から考察を加え、今後のまちづくりについて展望を述べるものとする。

1. シビックプライドとまちづくり

（1）シビックプライドとは

シビックプライドとは、「このまちをより良い場所にするために自分自身が関わっている」という当事者意識を伴う自負心である[1]。例えば、あるまちの幹線道路に植えられた樹木の剪定士や、シンボリックな建築物を設計した建築士は「美しいまち並みの形成に一役買っている」というシビックプライドを有しているかもしれない。また、農業が盛んな地域の農家のおじいさんに、「安全でおいしい作物を育ててきた」という自負があれば、それはシビックプライドとして捉えられるだろう。

また、シビックプライドは郷土愛やまち自慢等と似た概念として捉えられることも多いが、当事者意識を伴う点で、それらとはややニュアンスが異なるものである。近年では、シビックプライドの概念に対する自治体の関心も高まりつつあり、例えば富山市では、シビックプライドの醸成を市の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」における具体的施策の1つとして明確に位置付け、既にいくつかの取り組みが展開されている[2]。

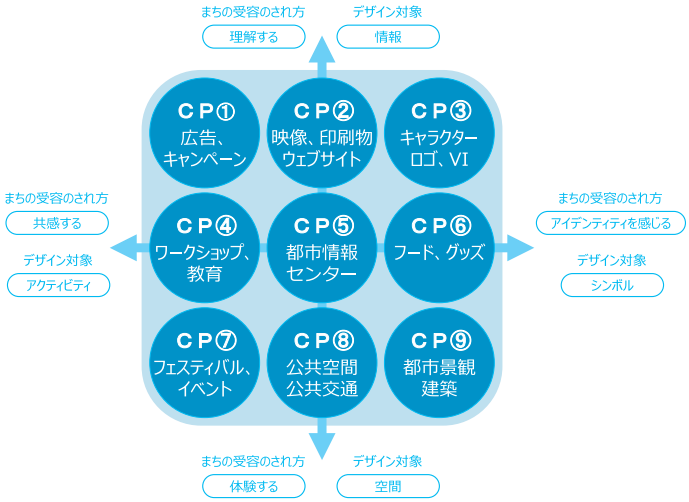
（2）まちづくりとの関係

シビックプライドは、そのまちのアイデンティティと市民のアイデンティティを結び付けるものである。そのため、市民にシビックプライドが醸成されていくにつれて、市民のまちづくりへの参加意欲を喚起し、より多様な主体によるまちづくりの展開が期待される。そして、その活動がまちをより魅力的なものとし、また、評価されることで市民のシビックプライドを醸成するという好循環を生み出すことが可能となる。

（3）シビックプライドとコミュニケーションポイント

市民のシビックプライドを醸成していくためには、まちづくりに関わる主体が、その活動に込めた想いやメッセージを発信し、市民の共感を育んでいくことが重要である。そのためには、その想いやメッセージを市民と共有する接点となる「こと」や「もの」（＝コミュニケーションポイント）を、まちの中に創出していくことが必要となる。コミュニケーションポイントについては、まちの受容のされ方と、それに応じたデザイン対象の観点から、以下の9つに分類される（図Ⅰ参照）。

図Ⅰ　9つのコミュニケーションポイント



出典：「シビックプライド2【国内編】」より一部筆者加筆修正

シビックプライドを醸成するためには、これらのコミュニケーションポイントをうまく連動させ、まちやまちづくりに対する市民の理解を深めてい

1　シビックプライド研究会編著『シビックプライド2【国内編】- 都市と市民のかかわりをデザインする』（宣伝会議、2015年）伊藤香織・紫牟田伸子監修、p126
2　富山市「富山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」（平成27年9月）参照
3　茨城県ホームページ参照
4　筑波研究学園都市交流協議会ホームページ参照

くことが重要である。

以下では、シビックプライドの醸成について、つくば市を取り上げ、考察を加えるものとする。

2. つくば市におけるシビックプライドの醸成

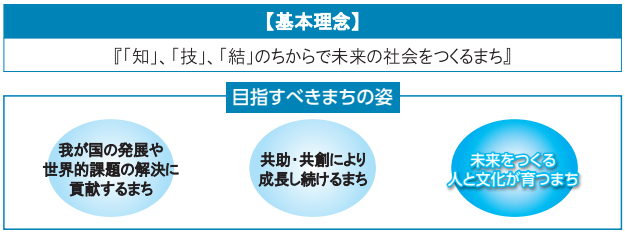
つくば市は、筑波研究学園都市建設法に基づき人工的に整備された都市であり、平成30年4月現在の人口は234,455人[3]と、県南地域最大の都市である。市内には、国等の研究・教育機関が29、民間企業を含めると100を超える研究機関が立地し[4]、2万人を超える研究者を有する日本最大のサイエンスシティとなっている[5]。

以下では、シビックプライドの醸成について、(1)つくば市の取り組みとして科学技術振興指針、(2)つくば市に立地する研究機関として「筑波宇宙センター」の取り組みを、それぞれコミュニケーションポイント創出の観点から取り上げることとする。

(1) つくば市科学技術振興指針に基づく取り組み

つくば市では、平成29年5月に「つくば市科学技術振興指針（第2期）」(以下､「指針」という。)を策定した。その中で、*「市民も、大学・研究機関も、企業も、行政も、つくば市に集うあらゆる者が繋がり（ソーシャルキャピタル）、地域に誇りや愛着を持つこと（シビックプライド）で、地域全体が年代・性別・組織・国籍等の壁を越えて「結」び付く社会を実現します。」*[6]とし、本稿における定義より広く対象を捉えているものの、既にシビックプライドへの言及がなされている。そして、*『「知」、「技」、「結」のちからで未来の社会をつくるまち』*という基本理念を掲げ、目指すまちの姿を*「我が国の発展や世界的課題の解決に貢献するまち」「共助・共創により成長し続けるまち」「未来をつくる人と文化が育つまち」*とした。

図Ⅱ　つくば市科学技術振興指針（第2期）概要



基本方針	主な取り組み
1．未来社会を先導する先進的課題への挑戦	Ⅰ 超スマート社会に向けた先進的取組の推進
	Ⅱ ロボットの街つくばの推進
	Ⅲ 優れた技術シーズの地域課題への活用
2．地域イノベーションを推進する共創・成長の促進	Ⅰ 地域イノベーション推進の中核機能の強化
	Ⅱ 国内外の地域・企業との広域連携の推進
	Ⅲ つくば国際戦略総合特区の推進
	Ⅳ 未来を担う人材育成支援
	Ⅴ 地域企業等の創業・成長支援
3．科学技術を通じた市民の交流・学びの促進	Ⅰ 最先端科学技術を体感・学習できる機会の充実
	Ⅱ 大学・研究機関・民間企業等と市民との架け橋となる取組を推進
	Ⅲ 科学技術を活用した教育機会の充実
	Ⅳ まちぐるみでの研究者等の支援
4．つくばブランディングアプローチの推進	Ⅰ つくばの魅力を結集した成果の見える化
	Ⅱ 国内外の地域・企業への情報発信の推進

出典：つくば市科学技術振興指針（第2期）より筆者作成。シビックプライドの醸成に特に関係すると思われる項目に網掛。

このうち*「未来をつくる人と文化が育つまち」*とは、*「科学技術と触れ合い、感じ、学ぶ機会を提供することで、科学技術を介してあらゆる世代がつながり、コミュニティが形成され、未来をつくる人や文化が育つまち」*[7]であるとされ、その実現のための主な施策や具体的な取り組みとして、以下のものが挙げられている。

①最先端科学技術を体感・学習できる機会の充実

スポーツや芸術、文化等の各種イベントと科学技術の融合・コラボレーション（まつりつくばやつくばマラソン等への科学技術の導入）

②大学・研究機関との懸け橋となるような取り組み

つくば市出前講座､つくば科学出前レクチャー、つくば科学フェスティバル、つくばちびっ子博士等

(2) 筑波宇宙センターの取り組み

筑波宇宙センターは、宇宙航空研究開発機構（以下、「JAXA」という。）の施設の1つであり、1972年に開設した最新の試験設備を備えた研究施設である。ここでは、①宇宙からの目となる人工衛星の開発・運用及びその観測画像の解析、②「きぼう」日本実験棟を用いた宇宙環境利用や宇宙飛行士養成と活動推進、③ロケット・輸送システムの開発と技術基盤確立のための技術研究推進を行っており、日本の宇宙開発の中枢センターとしての役割を果たしている[8]。筑波宇宙センターの活動については、広報担当者へのヒアリングに基づき、市民のシビックプライド醸成のためのコミュニケーションポイントの創出という観点から主なものを取り上げる[9]（各取り組みの（CP○）は前掲図Ⅰ「9つのコミュニケーションポイント」のCP①～⑨に対応）。

5　つくば市ホームページ参照
6　つくば市「つくば市科学技術振興指針（第2期）」（平成29年5月）、p1より抜粋
7　前掲6、p1より抜粋
8　筑波宇宙センターホームページ参照
9　筑波宇宙センターの取り組みに関する事実関係は、全て広報担当者へのヒアリングに基づくもの

①巨大なH-Ⅱロケット（ＣＰ⑨）

筑波宇宙センターの入り口付近には、50ｍもある巨大なH-Ⅱロケットの実機が展示されている。筑波宇宙センターの研究施設をバックにした構図は人気が高く、この撮影ポイントには、多くの来訪者が写真撮影に並ぶという（写真Ⅰ参照）。このようなモニュメントは、「宇宙」というコンテンツ、あるいは「筑波宇宙センター」を対外的にPRするとともに、市民に認知されやすいコミュニケーションポイントとして大きな役割を果たしていると考えられる。

写真Ⅰ　屋外に展示されているH-Ⅱロケット

平成30年5月17日筆者撮影

②常設型・常時開放型のイベント（ＣＰ⑦）

筑波宇宙センター敷地内にあるスペースドームでは、日本の宇宙開発を進めて来たJAXAの歩みが紹介されているほか、ロケットや人工衛星等の実機・模型も展示されており、年間を通して無料で公開されている（写真Ⅱ参照）。

来場者は、子ども連れのファミリー層から、若いカップル、エルダー層、シニア層と幅広く、多様な市民とのコミュニケーションポイントとしての役割を担っていると言える。

写真Ⅱスペースドーム外観と内部の様子

左：スペースドーム外観（平成30年5月17日）
右側上下：スペースドーム内部（平成30年6月10日）
いずれも筆者撮影

③スポット型のイベント（ＣＰ④、ＣＰ⑦）

ⅰ．秋の「特別公開」

筑波宇宙センターの最も象徴的なイベントとして、毎年秋季に開催される「特別公開」が挙げられる。特別公開では、普段は立ち入りが制限されている敷地内の設備に1日限り無料で入場することができる。そして、筑波宇宙センターのエンジニアと共に行う科学実験イベントや、宇宙飛行士講演会等、科学や宇宙を身近に感じられるコンテンツが施設内各所で展開される。この特別公開への来場者は、就学前の子どもから年配の方まで幅広く、平成29年の来場者数は約12,000人を記録した。

ⅱ．パブリックビューイング

先述のスペースドームでは、ロケットの打ち上げ時等にパブリックビューイング（以下、「PV」という。）を開催している。打ち上げの様子はインターネット上の動画配信サイトでも放映されているが、PVでは、スペースドーム内のスクリーンに映し出されているロケットの打ち上げの様子について、エンジニアの解説を受けながら見ることができる。PVの参加者はつくば市民が多いが、遠方の地域から足を運ぶリピーターも存在するなど、コアなファンの獲得につながっているという。ロケット打ち上げの時間帯にもよるが、最近では1回300人程度の来場がある。

④今後の取り組みに関する展望

筑波宇宙センターでは、同センターが地元の理解により研究開発や施設運営が可能であるという認識のもと、引き続き理解を得られるよう取り組みを継続していくことが重要であると考えている。

さらに、市とも連携し、科学のまちとしてのイメージ向上を図るとともに、筑波宇宙センターとしても「科学のまちのランドマーク」の一つとしてあり続けられるよう努めていくとしている。

（3）つくば市民の意識

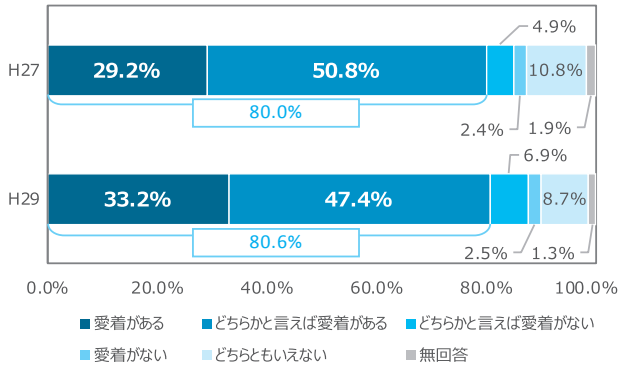
以上、シビックプライドの醸成に資すると考えられる取り組みを見てきた。以下より、これらの取り組みが市民のシビックプライド醸成に与えた影響を見ていく。なお、本稿執筆時点では、シビックプライドの醸成度合いそのものを定量的に把握することは困難であることから、つくば市民意識調査より、①つくば市への愛着、②自慢できるこ

とへの回答結果から考察していくこととする。

①80%以上が「愛着がある」

市民の愛着について、「愛着がある」「どちらかと言えば愛着がある」の割合合計を見ると、平成27年度が80.0%、平成29年度が80.6%と、高い水準を維持している。また、最もポジティブな回答である「愛着がある」という選択肢については、29.2%から33.2%とわずかながら上昇しており、市民の愛着度も高まりつつあると考えられる。

グラフ 1　つくば市への愛着の推移

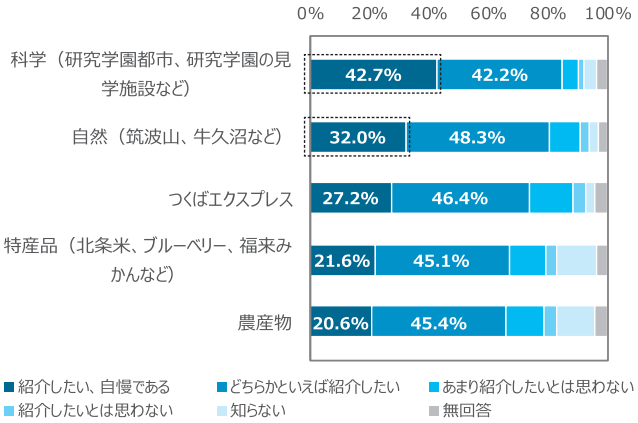


出典：つくば市「平成27年度つくば市民意識調査報告書」及び「平成29年度つくば市民意識調査報告書」より筆者作成

②自慢できることは「科学」

市民が自慢できることについて、「紹介したい、自慢である」「どちらかと言えば紹介したい」の割合合計を見ると、「科学（研究学園都市、研究学園の見学施設）など」が84.9%と最も高く、次いで「自然（筑波山、牛久沼など）」が同80.3%となっている。これら2項目について、最もポジティブな回答である「紹介したい、自慢である」の値

グラフ 2　つくば市民が自慢できること（上位5つ）



出典：つくば市「平成29年度つくば市民意識調査報告書」（平成29年11月）より筆者作成

を比較すると、10ポイント以上「科学」が上回っており、より対外的に自慢できるまちの資源であると認識していることが分かる。

このように、つくば市民はつくば市に対する愛着を有し、また、科学を自慢できるものとして認識している。これまで見てきたつくば市や筑波宇宙センターの取り組みが、市民のシビックプライド醸成に一定の効果を上げていると言えるだろう。

おわりに

本稿では、近年注目を集めつつあるシビックプライドについて、その醸成に資する取り組みとしてつくば市を取り上げてきた。

先に述べた通り、つくば市は筑波研究学園都市建設法に基づいて建設された研究学園都市であり、研究機関の移転により異なる地域から多様なバックボーンを持つ人々が多数移住してきたという特徴を持つまちである。そのため、移住してきた市民のシビックプライドをいかに醸成していくかということは、他の自治体に比べて困難な課題であると言える。そうした意味では、行政、市民だけでなく、研究機関をも巻き込み、一体的なまちづくりを進めていくことが求められていると考える。

そのためには、各研究機関の取り組みに加え、「“科学のまち”つくば」というメッセージを付加し、研究機関が一体となって発信することで、より効果的に市民のシビックプライドが醸成されるものと考えられる。そうした市民のシビックプライドから何らかのアクションが生まれ、より良いつくばのまちづくりにつながり、それが市内外のつくば市のファンを増やし、ひいては各研究機関のファンを生み出していくという好循環を生み出せるよう、今後の取り組みとその後の展開に注目していきたい。

【主な参考文献等】

1.シビックプライド研究会編著（2015）『シビックプライド2【国内編】- 都市と市民のかかわりをデザインする』伊藤香織・紫牟田伸子監修、宣伝会議

2.一般財団法人アジア太平洋研究所　都市の活力と魅力研究会「水都大阪のシビックプライド―市民が響く都市政策のかたち―」2012年5月